

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02349

研究課題名(和文) 演劇におけるジャポニズム 海外巡業劇団の伝えた「日本」 -

研究課題名(英文) Japonism in Theatre: Japan as Introduced by Japanese Touring Theatre Companies

研究代表者

根岸 理子 (Negishi, Takako)

東京大学・教養学部・特任研究員

研究者番号：80322436

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭に欧米諸国を巡演し、人気を誇った日本女優・マダム花子の一座に関する資料を内外で収集し分析することにより、もと芸者で女優の一座での子役の経験もあった花子が、自らの技芸を生かしながら、海外の人々が持つ「ニッポン」のイメージを投影する舞台作りをおこない、成功を積み重ねていった軌跡を明らかにした。マダム花子は、主として彫刻家ロダンのモデルとして知られている人物であるが、20世紀初頭、日本の演劇を紹介するにふさわしい人物であり、国際的に活躍する日本人アーティストの草分け的存在であったことを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀初頭、海外でデビューし、20年におよぶ活躍ののち、日本に帰国し以後舞台に立つことのなかった日本女優・マダム花子については、関係資料が海外に分散しているため、これまでまとまった研究はなされてこなかった。特に日本における資料・調査と西欧における資料・調査をつなぐ総括的な研究が必要とされていた。

本研究ではそれを実行し、成果を一般の方々にも分かるよう書籍にまとめることができた。ロダンのモデル、あるいは森鷗外の小説「花子」のヒロイン(のモデル)でもある花子が、自らの技芸を生かしながら、海外の観客が見たがっている「日本」を意識的に見せ、成功をつかんでいった軌跡を示せたものと思う。

研究成果の概要(英文)： This study examined the performances of Madame Hanako's company, given at the beginning of the early 20th century when Western people had limited opportunities to see Japanese theatre. I collected extensive material on her company from both the West and Japan. The examination of these materials illuminated how Madame Hanako succeeded in the West. She projected a Western image of 'Nippon (Japan)' in her performances by using the skills she acquired through her experiences as a child actor with the female kabuki performers and her training as a geisha. Her skills were developed through the kabuki tradition. Therefore, she was a suitable actress for introducing Japanese theatre to Western audiences during this period. Furthermore, Madame Hanako can be regarded as a pioneering Japanese artist who won an international reputation.

研究分野：近代日本演劇

キーワード：ジャポニズム 女優 日本人論

1. 研究開始当初の背景

海外の人々にとって日本人そのものさえ目にすることが珍しかった 19 世紀末から 20 世紀初頭、日本の巡業劇団は日本人および日本演劇がいかなるものかを知らしめる役割を果たした。そのような巡業劇団のうち、川上音二郎・貞奴(マダム貞奴)夫妻の一座については、夫妻がのち日本演劇界で活躍したこともあり、研究が進んでいるが、海外で女優としてデビューし、20 年近くにおよぶ活躍ののち、日本に帰国し、以後芸能の世界からは離れて生きた マダム花子 については、まとまった研究はなされていなかった。

マダム花子 は演劇史上、非常にユニークな存在であるといえる。マダム花子 こと太田ひさは 1868 年、愛知県の裕福な農家に誕生している。幼い頃から日本舞踊や三味線などの芸事に親しんだが、やがて家庭の事情で女役者の一座の子役として舞台に立つようになり、のち、芸者になる。二度の結婚の失敗により、デンマークのコペンハーゲンで催されることになった小規模の博覧会(日本人村)に踊り子・芸者として参加することを決意し、1902 年、34 歳で渡欧。博覧会終了後も帰国せず、英国ロンドンに在住していた日本芸人を集めた一座に女優として参加する道を選ぶ。当初は端役を演じていたが、花子より先に国際舞台で成功をおさめていた川上音二郎・貞奴一座の第二回海外巡業をお膳立てした名プロデューサー、ロイ・フラワー(自身もダンサーとして欧州で成功をおさめたアメリカ人)に見出され、座長および主演を務めるようになる。以後、欧州諸国とアメリカを巡演して人気を博し、1921 年日本に帰国するまで舞台に立ち続けた。花子の演技に魅了された彫刻家オーギュスト・ロダンは、彼女をモデルとした彫刻を 53 点も生み出しており、また、コンスタンチン・スタニスラフスキーやフセヴォロド・メイエルホリド、ニコライ・エヴレイノフ、エドワード・ゴードン・クレイグなど、当時の名だたる演劇人たちが彼女の舞台に注目し、インスピレーションを得ている。

こうした マダム花子 一座に関する調査・研究は、少なからず存在するものの、日本側がおこなったものと、西洋側がおこなったもので傾向が異なっていた。主として日本側のものは、花子の人生を中心に紹介しており、西洋側のものは、当時の欧米の観客・芸術家が花子の舞台に興味を持ったのはなぜかという問いに答える形のものが多く、日本での資料・調査と西欧での資料・調査をつなぐ総括的な研究が必要とされていた。そうした意識に基づいて日本と海外双方において花子関連の資料の収集・分析を続ける過程で、花子一座を中心とした海外巡業劇団のジャポニズムへの関与というテーマに興味を持つに至ったのである。

2. 研究の目的

19 世紀末、西欧の演劇界に日本ブームともいえる現象が起こったが、それは、日本風の設定の舞台を日本人ではない者が演じるというものであった。これは、西欧の人々が自分たちの想像する ニッポン を自ら舞台上で表現したものであるといえよう。そうした状況の中、日本の巡業劇団は、欧米の人々がそれまで目にする機会がなかった 日本の芝居 を見せ、幻の国 ニッポン の「本物の姿」を示すことで、さらなる日本への興味をかきたてたのである。演劇におけるジャポニズムの研究は、近年着手されたばかりであり、特にマダム花子一座の関与について詳細に検討されたものは未だなかった。こうした「日本人のイメージの形成」についての検討は、「現在の日本人のイメージ」自分たちが持っているイメージとどれほど異なっているのか、どのように変えていけるのか、良いものならばどのようにそれを生かしていけるのか を考えるに当たって多くのヒントを与えてくれる。日本論・日本人論へとつながっていく、日本にとって意義があるだけでなく、海外の学者にとっても非常に益のある研究であると考え、マダム花子一座が舞台上で表現し伝えた 日本 を検討することとした。演劇が観客を必要とし、また、興行上の成功を目指すものである以上、これは、現代の日本演劇の海外上演においても、関わりのあるテーマであるといえよう。

3. 研究の方法

本研究では、海外に点在し、個別に考察されてきたマダム花子一座に関する資料を可能な限り収集し分析することとした。花子は欧州一円とアメリカを巡演しているが、花子と縁が深く、資料を得やすい国での調査を優先した。花子一座が拠点としていた英国には、多くの資料が残されていたので、重点的に調査をおこなった。さらに、日本においても花子に関する資料を収集し、内外の資料を精査することにより、マダム花子一座の実態とそのジャポニズムへの関与を明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

劇評や一座の関連記事など、多くの新資料を収集することができたが、最も大きな収穫は、マ

ダム花子が契約していたエージェンシー関連の資料を英国での調査において発見できたことであった。20世紀初頭、欧米ではすでに世界的に活躍するアーティストのマネージメントを請け負うエージェンシーが幾つも存在していたのだが、今回の研究で得た新資料により、花子がそうしたエージェンシーと契約を交わして、諸国で興行をしていたことが判明したのである。彼女が契約したエージェンシーの一つ、Sherec & Braffは、英国のみならずドイツにも営業所を持ったエージェンシーであり、アメリカで契約を交わしたWilliam Morris Officeは、現在でも営業を続け、今やハリウッド最大級のエージェンシーとなっている（現在はWilliam Morris Endeavor Entertainmentとなっている。最近ではヘンリー王子妃メーガン・マークルと契約を交わしたことで話題になった）。こうしたエージェンシーは、成功が見込まれるアーティストとしか契約しなかったことを鑑みると、この事実は花子一座の人気と実力の程を示しているといえるだろう。

また、花子より先に国際舞台で称賛を浴びた「マダム貞奴」こと川上貞奴が1916年に洋行を計画した折、花子のエージェンシーであるSherec & Braffに力を借りようとしていたことや、Sherec & Braffと共に花子のマネージメントをおこなっていた英国の興行師チャールズ・ブレーク・コクランが、剣劇の筒井徳二郎の1930年ロンドン公演に協力していることから、海外巡業劇団がそれぞれ先んじて活躍した一座の人脈的な恩恵を受けているらしいことや、すでに形成されているイメージを生かす形で公演をおこなった部分もあることが明らかになった。

日本における調査（外務省外交史料館）では、1902年の花子の渡欧の状況と、1917年の再渡欧の状況を知ることができた。花子は1916年、自らのエージェンシーSherec & Braffとチャールズ・ブレーク・コクランの依頼により、新作に参加する踊り子を連れてくるため、14年ぶりに日本に一時帰国したのだが、その後、英国に戻るのに時間がかかった（1917年の秋には英国ロンドンのコリシアムで公演をおこなったことが確認できている）のは、当初、ロシア経由で英国に向かう予定であったからだと思われる。ロシア革命（二月革命）がおこったため、当初の計画を変更せざるを得なかったのである。

日本ではさらに花子が晩年を過ごした岐阜（岐阜県図書館）で調査をおこない、英国でIndependent Theatreを設立した著名な演劇人ヤコブ・トーマス・グラインによる劇評を発見することができた。1914年に花子がアンバサダーズ劇場（チャールズ・ブレーク・コクランが支配人をしていて）で上演した喜劇『おたけ Otake』悲劇『キムスメ Ki-Musume』の劇評であり、その中の、日本語がまったく分からなくとも、その確かな技芸によりすべてが伝わるというくだりは、花子が海外で成功した理由のいくらかを説明してくれているように思われる。

もと芸者で女優の一座での子役の経験もあった花子は、自らが歌舞伎に多くを負っていることを自覚しており、その技芸を生かしながら、海外の人々が持つ「ニッポン」のイメージを投影する舞台作りをおこない、Self-Orientalizationともいえる姿勢で成功をつかんでいったのである。花子は、日本では主として彫刻家オーギュスト・ロダン（1840 - 1917）の唯一の日本人モデルとしてのみ知られている人であるが、20世紀初頭、日本の演劇を紹介するにふさわしい人物であり、国際的に活躍する日本人アーティストの草分け的存在であるといえよう。

こうした今回の研究における成果は、書籍（『マダム花子』、論創社、2021年）にまとめて報告した。花子一座がいかに広い範囲にわたって公演をおこなっていたかを視覚的にも示すため、これまで分かっている巡業経路も地図にして書籍に掲載した。書籍出版後、いくつかの新たな課題が生まれ、またその後分かったことなどが多々あった。これまで、花子の同国人たる日本人は、主として海外における花子の舞台やその人気を批判的に見ていたとされているが、少なからずの在外邦人が彼女の活動を助けていたことが判明したので、そうした当時の在外邦人（コミュニティー）についての調査も進め、論文（『マダム花子と同胞たち 異国における日本人の輪・和』、『文學藝術』44号、2023年）にまとめた。その論文を執筆する過程で、花子が（ロシア）パテ社製作の映画に主演していたことが新たに分かったので、その映画についても研究会において発表した。今後はこの映画（現時点で2本の映画に主演していたことと、その映画が現存していることが確認できている）に関する調査を進め、歌舞伎を基礎とした花子の演技が映画に残されたことの意義を明らかにしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 根岸理子	4. 巻 44
2. 論文標題 マダム花子と同胞たち 異郷における日本人の和・輪	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文学藝術	6. 最初と最後の頁 11-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 根岸理子
2. 発表標題 マダム花子ー国際的コラボレーションに参加した日本俳優の先駆け
3. 学会等名 西洋比較演劇研究会（日本演劇学会分科会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 根岸理子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 232
3. 書名 マダム花子	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------